

児玉光雄著「天才社員の育て方」日本経営合理化協会 2006年7月1日刊を読む

石の上にも最低3年 - 継続から生まれる驚異的な力 -

1. はじめに

持続力をつけるためには、「コツコツ継続してこなす習慣」をつけることです。そのためには、単純作業や簡単な作業であっても、とにかく毎日毎日、継続してやるということです。その期間というのは、「石の上にも3年」という諺がありますが、一流とかプロフェッショナルになるためには、3年では短すぎます。実際には10年以上の歳月を必要とします。

2. 石の上にも最低3年

(1)イチローが本格的に練習を始めたのは、父宣之さんと毎日、バッティングセンターに通い始めた小学3年生からです。それからまさに毎日毎日、地道に練習を続けて、一流選手としての称号を得たのは、210本の安打を打ち、打率3割8分5厘で首位打者に輝いた1994年の時です。この間、13年が経過しています。

(2)ゴルフ界のスーパースター、タイガー・ウッズは3才でゴルフを始めています。初めて70台のスコアを出したのが8才の時、12才の時に60台のスコアを出しています。そして、15才の時に全米ジュニア選手権で優勝。この段階で、すでに12年経過していますが、彼が名実共にトップアスリートの仲間入りを果たしたと言えるのは、アマチュアのトップにたどり着いたときで、それは全米アマチュアチャンピオンとなった18才で、15年の歳月が流れています。

(3)2004年、アテネ・オリンピックの競泳800メートル自由形で優勝した、私が教鞭をとる鹿屋体育大学の柴田亜衣選手は、女子自由形で日本人初の金メダルを獲得したことで、日本中を沸かせてくれましたが、彼女が水泳を始めたのは3才の時です。金メダルまで19年の月日を要しています。

(4)5年に一度開催される、音楽家の登竜門、ショパンコンクールの2005年度では、関本昌平さんと、山本貴志さんの二人の日本人が入賞いたしました。それぞれ音楽教室に通い始めてから15年、18年の歳月が経過しています。

(5)アトランタ・オリンピックでの陸上で、史上初の 200 メートル、400 メートルで金メダルを獲得したマイケル・ジョンソンは、「私は高校生のころ、200 メートルを 21 秒で走っていた。高校生としては、まずまずの成績だった。それから 10 年間の、絶え間ない努力によって、19.5 秒で走れるようになった」と話しています。10 年間でたった 1.5 秒。しかし、絶え間ない努力の継続によって生み出されたこの 1.5 秒こそが、平凡な選手と世界一の選手との差なのです。

3. おわりに

(1)偉大な仕事を達成するには、地道にコツコツ、努力を続けるしか方法がありません。お金は一度に稼ぐことができますが、時間は稼ぐことができないのです。

(2)天才と呼ばれる人たちは、表向きの華やかさとは裏腹に、血のにじむような努力を継続しています。人間に与えられている唯一平等なものは、一日 24 時間という時間だけであり、他に抜きん出るためには、努力の時間を多くするしかない知っているからです。そして安心させられることに、この例外を破る天才は、ただの一人もいないということです。

(3)コツコツとこなすことにより、人生の軸がそこから自然に生まれ、個性も育ちます。達人となる人は、一つのことの奥に必ず潜んでいる「金鉱」を、何年も何十年もかけて掘り起こすスタミナがあります。そして求めていた宝を手に入れるのです。このスタミナは毎日こなす習慣から生まれてくるのです。

(4)このことは、さらにもう一つ大事な「本物の負けん気」という素養を育てることにもなります。何かを成し遂げていくためには、人一倍の負けず嫌いでないと、困難に立ち向かっていくことはできませんが、毎日の継続から生まれてくる忍耐力、根気、持久力などから達成することへのコダワリが自然に培われていき、^{ねば}粘り強さにも発展していきます。

(5)一流の人やプロフェッショナルの人たちが総じて負けん気が強いのは、単なる偶然などではありません。生まれつきの面もありますが、コツコツこなし続けたことで、負けず嫌いに育っているのです。

P138 ~ 141

[コメント]

自分のもつ潜在能力を顕在化するためにはどうしたらよいかを考えるとときに、児玉光雄先生の本著は極めて有益と確信する。是非御一読を。

- 2009 年 5 月 4 日林明夫記 -